simC News Letter
Sendai International Music Competition
2025年5月25日号
仙台国際音楽コンクールニュースレター
第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24（土）～6.8（日） ピアノ部門 2025.6.14（土）～2025.6.29（日）

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門レポート

予選 第1日目　2025年5月24日（土）

音楽ジャーナリスト：正木 裕美

第9回ヴァイオリン部門では、出場申込193名のうち41名が予選に進み（うち4名辞退）、初日は13名が出場した。課題曲はイザイの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第5番とオーケストラ（指揮者なし）を伴うモーツァルトのアダージョK261、ロンドK373。直近の過去2回で課されていたJ.S.バッハのヴァイオリン協奏曲からの変更は、今回の課題曲における最大の特色と言えるだろう。これにより出場者はすべてのラウンドでモーツァルトを演奏することになり、様式感や構築力、音楽性を異なる編成の中で示すべく、より一層柔軟なアンサンブルを求められることになった。なお管弦楽は室内楽編成の仙台フィルハーモニー管弦楽団(2チーム)、山形交響楽団が交代で務めた。

イザイのソナタにおける初日の傾向としては、勢いや力強さで技巧面にフォーカス（もしくはカバー）する者、俯瞰的に音楽を構築し、音色や旋律の弾き分けまで至る者と、奏者の力量が露わになった。またモーツァルトでは、特にロンドでオーケストラとの微妙なずれが生じる場面が散見された。これには勢い任せの速いパッセージ、あるいは音価をおざなりにした過度な推進力、などの理由が挙げられ、改めてモーツァルトにおけるアンサンブルの難しさも露呈した。

その中で、韓国出身のキム・ハラムはいずれもバランスが良く、イザイは無駄のない運指や運弓で、技巧や音域に左右されることがない。モーツァルトではフレーズを端正に歌い込み、ロンドではオーケストラとの伸縮性に富んだ闊達なアンサンブルが見られた。ただ1点、強拍で足を踏み鳴らす行為は、好悪が分かれるかもしれない。

イザイではパク・ソヒョン（韓国）が抜きんでた構築力を発揮した。堅固な組み立てが楽想の変化を浮き彫りにし、その上第1楽章では微細なテンポの揺れによる「自由な拍」も併せ持っていた。また第2楽章テーマの再現部以降の精彩な山場は、練り上げられた構成ゆえだろう。

チン・イェヨン・ジェニー（韓国）もイザイで確かな構成力を見せたが、特筆すべきはモーツァルトだろう。アダージョにおける優美なレガートによる品位と伸びやかさ、ロンドにおける密な対話が生み出す主旋律と内声部の弾き分けは、自然で作為性がなく、静謐さを讃えたモーツァルトであった。

ロン＝ティボー国際コンクール他で入賞歴のあるヴィクラム・フランチェスコ・セドーナ（イタリア）は余裕も漂う演奏で、イザイでは作品を俯瞰し、極めて流麗。第2楽章のテンポはゆったりとして、リズムの強調よりも色彩の移ろいに意識を向けているようだった。モーツァルトでは一音一音を切って発音する場面もみられ、ヴィブラートはかけるものの、ピリオド奏法の要素も。今年から審査には古楽界をリードする寺神戸亮も加わっており、その評価も気になるところだ。

このほか、パク・ウォンミン（韓国）の艶やかで濃密な音色と凄烈なテクニックも強い印象を残したが、音が鳴ってしまうゆえに翳りを帯びず、全体的にロマンティックで濃厚な色合いが強かった。ただ、彼女を含めて韓国からの出場者の多くは発音が的確で、音域の差も音量や音色にほぼ影響しない。時代の趨勢とは言え、総合的に高いレベルを印象づけた。

■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団　仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ケ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp